

第一回 国立動物園を考えるシンポジウム

「動物園は野生動物を救えるか 新たなる動物園への道」

講演全文 木下直之「国立動物園を構想する意義について」

前にお話になった方々とは全く違う立場から、私は動物園のことを考えてきました。

明治時代の日本文化を追いかける中で、博物館では何がどのように展示されてきたのかということにずっと関心を持ってまいりました。私自身、大学卒業後は美術館、それも公立美術館に15年ほど学芸員として勤めておりましたので、博物館、あるいは展示施設に対する関心は、当然ですけれど、強く持っていたわけです。私が勤めた美術館は神戸の、もう無くなってしまったのですが、兵庫県立近代美術館という美術館でした。今は兵庫県立美術館と変わり、海に近いところに移ってしまいました。

その美術館と道一本隔てて、隣に動物園がありました。神戸市立王子動物園です。ほとんど何も接点がなかったのです。まったくあきれるぐらい、私の頭の中に動物園は入っていません。そこは、まだ幼なかつたころの子どもを連れて行く場所にすぎなかつたと言ってよいかも知れません。それから東大の博物館に移り、美術館だけではなくて、人はなぜ展示施設というものを作ってきたのか、展示施設を介して何を伝えようとしているのかなどの問題を考えるようになり、しだいに動物園が視野に入ってきました。

意外だったのは、動物園では「展示」という言葉を普通に使っていたことなのです。動物園の人からは当たり前と思われるかもしれないけれど、美術館にいた人間からすると、美術館は展示の場、美術作品を展示する場ということで、展示こそ自分たちの専売特許だと思っていました。動物園でも動物を展示すると称していることにびっくりしたわけです。ですから、そのように共有している活動があるにも関わらず、両者の人間には、すなわち学芸員と飼育員には会話が成り立っていないことを自覚し、ある時期から動物園の問題にも目を向け、動物園人にも語りかけるようにしました。

今日は、こういう形でお招きくださった「考える会」に感謝しております。小菅さんと岩野さんは、ここにいらした方はすでによくご存じだと思いますが、私の手元にある「戦う動物園」という本を出された、まあ、お二人とも非常に熱い動物園人だと思うんですね。その熱さに煽られて、ここに引っ張り出された。お二人の戦いを、一緒に戦ってみたいなという気持ちもあって、出てまいりました。

ただし、少し慎重に、「国立動物園を建設する意義については」ではなくて、「国立動物園を構想する意義について」というタイトルを私の話につけたのは、これが第一回目のシンポジウムですし、ほんとうにスタートを切ったばかりだと思うからです。いざ国立動物園建設となれば様々な問題が次から次へと壁になってぶつかってくるのではないかと思います。しかし、考えるだけなら、みなさんといっしょに居ながらにして出来るのではないかなと、そんなふうに思って、まずは国立動物園というものを頭の中に思い浮かべてみる。そのことの意義について、今日はお話したいと思っているわけです。

このシンポジウムは今年の春ぐらいから具体化していました。そこで、9月にこのような催しがあるということ私の周囲の人たちに漏らしたところ、反応はつぎの二つです。動物園についてあまり知らない人からは、「えっ、国立動物園ってないの?」と聞かれます。世の中に動物園があることは承知していても、それをいつ誰が

設置し、どのように運営しているのかということころまではあまり意識しないで、動物園に接してこられたんじゃないかと思うのですが、さらに踏み込んで国立動物園を考えようって言われた時に「えっ、国立動物園ってないの？」という反応を示した方が結構多かったですね。

一方、動物園に少し詳しい方、あるいは行政ですね、文化行政といいますか、今の日本の行政の在り方に関心をもっている人から見れば、「何を今さら、そんなの無理に決まってるじゃない」という反応が多かったように思います。要するに「今さら何で国立なの」という感想です。世の中では、国立施設はどんどん減らされているわけです。それを取って国立動物園を作ろうという、まあ提案そのものが疑われるしまうぐらいの意外性をもって受けとめられたように思います。

国立動物園がない。では、どこが動物園を運営しているのか。これは、先ほどの小菅さんのお話にも出てきたことと少し重なってまいりますけれども、まずはスクリーンのグラフをご覧ください。日本動物園水族館協会 JAZA のウェブサイトに出ている86園の内訳を見てみると、県立が7%、市立、区立も含めてですけれども70%、そして民間が23%という比率になっています。

ついでに言えば、指定管理者がどのくらい入っているのか。公立動物園の半分弱のようですね。意外とまだ入っていないという感じがしました。たぶん、水族館になると数字がもう少し増えるのではないかと思います。逆に言えば、動物飼育という専門的な技術を求められる動物園は指定管理者が入りにくい施設であるとも思います。

つぎは少し古い資料ですが、文部科学省が7年前に社会教育調査を行った時のデータから、全国の博物館の所管の比率を見てみましょう。これは文部科学省のHPに公開されていますので、すぐに見ることができます。博物館法でいう登録博物館、それから博物館相当施設がざっと1200館あるのですね。その所管別をみると、国、県、市町村、私立と分けて、市町村立と私立がだいたい半々、それぞれ500館ぐらいあるということが確認できるわけですが、この比率を動物園と比べると、やっぱり動物園は市立が多い。これは動物園の大きな特徴だと思うのですね。これからの動物園の在り方を考えていく時、あるいは国立動物園をなぜ必要とするのかと考える時にまず押さえておかなければいけない前提だと思えます。

同じ社会教育調査のデータの中から、登録博物館、博物館相当施設の館種別の比率もグラフにしてみました。すけれども、実際にはもう少し細かいデータが必要なので、あくまでも目安だと思ってください。たとえば動植物園がまた別枠で設けられていたましたが、このグラフには反映させておりません。これは日本の社会を見渡したらなんとなく想像がつく比率かなあと思いますね。われわれの社会には博物館と美術館が多く、博物館は歴史博物館が多い。歴史博物館と美術館がほぼ同数。むしろ美術館の方が多い。これは、私とその美術館学芸員を経験してきたということから見ても、日本の近代を、あるいは戦後の日本社会を考えていく上で、なぜこんなにたくさんの美術館作ってきたのかということを考えざるを得ないのですね。一方で動物園は今示したような数字にとどまっている。とどまっているとはいえ、世界的に見れば非常に多い数字です。しかし、社会全体を見渡したときに美術館が500館ほどあり、動物園が80園、ということその5分の1ぐらいでしょうか。その比率はどのように出来上がったのかということもまた、大いに考えさせられる数字ではないかと思うのです。

これも先ほどの小菅さんのお話に出てまいりました。日本の動物園はどのような時期に作られてきたのかということですね。グラフの一番左端に矢印をつけておきましたが、1882年、すなわち明治15年、もちろん上野動

物園の開園ですね。日本の動物園の歴史は始まる。もちろん、その前史もあるわけですが、上野動物園開園以後、ご覧のような数で動物園は増えてきたわけです。ただし、このグラフでは一番上までいっても7園なので、すごいピークがあるように見えますが、それほど大した数ではないのですけれど、先ほど指摘があったように公立動物園の開園は1950年代に集中している。ついで1980年前後にもう一つのピークがあるように思います。これも先ほど指摘があったとおり、民間、特にサファリパークがこの時期に建設されたことを示すグラフかなと思います。

少し上野動物園の話をしてみたいと思います。冒頭で申し上げたように、私は明治時代の文化を研究していますので、どうしてもこのあたりに入り込んでしまうものですから、今のお二人とは全く違う観点でこれからの動物園を語っていくということをご承知置きください。

これは『風俗画報』という、明治20年代に創刊された雑誌、絵入りの雑誌です。画報ですから当然ですが、挿絵がたくさん入っています。復刻版も出ているし、CDも出てますので、簡単に見ることが出来ます。この中の、上野動物園を紹介した絵はよく知られていて、かつ、これがおそらく上野動物園を描いた、たぶん一番古い絵だと思います。開園が明治15年ですから、それから14年ほど経った時点での園内の様子です。開園時はもっと狭かったのですが、日清戦争を機に北側に拡張していきます。この向こうが東京美術学校、今の東京藝大ですので、交渉して土地を得て、新たな飼育区域を拡張したあとの姿です。なぜ拡張したのかについては、後でまたご説明したいと思います。今、上野動物園に行きますと、園内にパネル展示されていますので、昔がどうだったかを偲ぶことができるわけです。閑々亭がある谷の辺りは当時の雰囲気をも伝えていきます。

最初になぜ上野動物園から話を始めたかということ、もちろん一番古いということもあるのですが、実は上野動物園が国立動物園であったことを思い出してほしいからです。明治15年に開園し、42年後の大正13年に、つまり前年に起こった関東大震災を機に、東京市に公園ともども下賜される。ですから、今でも上野動物園の正式な名称は恩賜上野動物園、恩を賜ったと書きます。上野公園も恩賜上野公園ですね。そのような歴史を有する上野動物園は、40年以上も国立動物園だったことになります。

ご覧いただいている写真のとおり、関東大震災で東京帝室博物館が大破します。現在の東京国立博物館本館の先代の建物ですね。この博物館の付属施設というかたちで、ほぼ隣接して上野動物園が建設されたわけです。東京国立博物館で売っているガイドブックの一冊に『一步近づいてみる日本の美術』があります。博物館に近づいて行けば行くほど日本の美術を知ることが出来るというタイトルからも分かります。この博物館はある時点から美術館に向けて大きく舵を切りました。そして、大正13年の時点で、併設していた動物園を切り離します。すでにその前からお荷物扱いをしていたのですけれど、それは博物館の所管の変遷からも読み取ることが出来ます。

博物館が自前の建物を持つのは明治15年ですが、その10年前から、文部省によって博物館という機関は設置されていました。それから内務省に移管され、そして開館直前に農商務省へと所管が移ります。それが明治19年になると、開館から4年後ですね、今度は宮内省の所管というようにめまぐるしく変わるのです。所管の変化は、博物館の性格を変えました。あるいは博物館に対する期待が変わったことを示しているわけです。戦後になると宮内省を離れ、これはまさしく日本国憲法施行の日なのですけれど、昭和22年5月3日に文部省の所管に入り、帝室が外れ、国立博物館として再出発をして今日に至っています。

なぜ所管を変えたのか。これはこの博物館の性格を如実に物語るわけですが、文部省が設置した時点で、総合的な啓蒙装置としての博物館を構想していたわけです。だからこそ、自然史部門、当時の言葉でいえば天産部門、つまり自然史博物館の性格を併せ持ち、その延長線上に生きた動物の展示を、すなわち動物園を必要にしたということになります。そのように出発した博物館だったわけです。ところが、内務省への所管替えは万国博覧会を強く意識しており、日本の物産を海外に売り込んでいくための拠点としての博物館を期待して舵を切るのですね。それは農商務省に移されるあたりでさらにはっきりして、博物館はいわば産業を振興させる殖産興業の場を目指します。

この時点で、動物はまだ博物館の視野の中に入っている。例えば、家畜を積極的に日本に導入し、育成し、改良しようという意味合いでは、博物館は動物を重要な展示物として扱っていたんだと思います。しかし、大きく変わるのは宮内省に移管されてからです。今度は、日本の古美術を中心とした博物館に大きく舵を切るからです。日本を代表する文化として、古美術にフォーカスを合わせていくのです。そこで京都と奈良にも博物館を建設します。ですから今でも国立博物館は東京、京都、奈良にあり、近年、九州に4番目の博物館が加わったことは皆さんご存知かと思います。もちろん、付属施設としての奈良動物園も京都動物園もつくられませんでした。

このように、明治政府が博物館に期待したものは日本文化を目にすることが出来る場所でした。あるいは、日本文化を外国に向かって知らせる場所、そのようなものだったわけです。ですから、付属施設としての動物園の位置づけが極めて曖昧になってくる。まあ、お荷物扱いと言ってもいいのではないかと思います。切り離したのは関東大震災の後ですけれども、その前から博物館のその天産部門を切り離そうとしていました。生きた動物だけではなく、たくさんの標本類も展示しておりましたので、それらの切り離しが関東大震災を機に、一気に実現したことになります。

現在でも国立博物館は文部科学省の所管ではありますが、ご存知のとおり、ここ10数年の行政改革の中で独立行政法人へと姿を変えたわけですね。国立施設の多くが独立行政法人に変わり、統合し、数を減らしています。見かけ上の数を減すような動きですから、当初は東京、奈良、京都を一つに括る独立行政法人国立博物館とされたのですが、そのあと、東京と奈良の文化財研究所と統合させ、国立文化財機構という改組したのが2007年です。ところが、さらに数をもっと減らそうということで、すでに閣議決定していますが、今度は国立文化財機構、国立美術館、それから日本芸術文化振興会、これ国立劇場を持っているところですが、これらを一つの独立行政法人にまとめる動きになっています。

ですから、こうした時代に「なぜ今さら、国立動物園なんだ」という反応は当然なのです。先ほど、小菅さんは国が動物園を持つべきだとおっしゃっていましたが、国立施設を減らしてきた国は絶対に作ってくれないと思いますね。それだからこそ、国立動物園をなぜ作る必要があるのかが真から問われるわけです。国立動物園がどうしても必要だという考えが広く共有されない限り、国としては絶対に作らないですよ。

『上野動物園百年史』が刊行されておりますけれど、この中に面白い一節があります。博物館と動物園が宮内省に移管された時期のことをこんなふうに語っています。「歴史美術館へと変貌した宮内省所管の博物館では天産部ひいては動物園も事業の上では必要欠くべからざる存在ではなく、ただその入園料収入だけが当てにされるようになったのである」。ずいぶん早くから動物園は入園料収入だけでいいと扱われている。実際に、当時は博物館の3倍の収入をあげていますね、ですから、人が入っていることは間違いないですけど、これは

まさに100年後の動物園人の漏らした恨み節かなと思います。

駆け足で動物園の所管をたどり直してみたわけですが、結局、その所管が変わるということは、性格をどう考えるのかということに密着しているわけです。ですから、国立動物園の建設を口にするのであれば、それを誰に向けて訴えるのかが問われます。文部科学省なのか、環境省なのか。あるいは第3の省庁なのか。簡単には国立動物園は実現しないだろうと思いますが、しかし、それを考えてみることには大いに意義があるのではないかと。それは取って今なぜ考えるのか、そのことにどのような意味があるのか、ということ整理してみたのがご覧のスライドです。

今日はみなさんのお手元に、レジメというわけではなくて、ここに書きだした言葉をそのまま書き連ねたものをお配りしておりますので、後で私の話を思い出すきっかけにしてください。そのためのメモ書きのつもりで用意しました。

なぜ今「国立動物園を考える」ことを皆さんに向かって呼びかけるのか。これはすでに、お二人の話の中に問題がはっきりと浮き上がってきていると思うのですが、まずは現在の動物園が行き詰まっているからです。

一つには、外国から珍しい動物を連れて来て、それを飼育展示するという従来のあり方が行き詰っています。希少な動物は集めにくくなっている。動物を野生の状態から持ってくることはほとんど出来なくなっていますから、動物園相互の間で繁殖させ、飼育動物を増やすことが、今行われているわけですね。この在り方を変えない限り、動物園は縮小していきたくらうと思います。ゾウのいない動物園がつつぎと出現しています。

それから、いうまでもなく、地方自治体の財政難が動物園の経営を圧迫しています。市立の動物園が多いということに深くからんでいるわけですね。そのためには、少しでも人が入るような形での方向転換を求めることによる行き詰まりもあると思います。

動物福祉への配慮も無視できない問題ですね。動物園とは、相当無理のある奇妙な施設だと思います。動物園について考える時には、そもそも動物園とは何かという定義が必要だろうと思うのですが、動物園が動物園であるために譲れない最後の線が生きた動物の展示です。バーチャルな世界の対極にあるわけです。映像は氾濫しており、動物園では見られない本来の生息地での姿をいくらかでも映像で見ることが出来ます。しかし、それはどこまでも行っても映像にすぎない。動物園の強みはやはり生き物、本物を見せるということなのだろうと思うのです。

と同時に、それらを我々の暮らしの中に困り込むという、これまた動物園が動物園であろうとする時に逃れられない宿命ですね。そのこと自体が非常に奇妙です。奇妙というよりも、かなり無理のある施設なわけです。飼育される動物の福祉が考えられれば考えられるほど、これまでの在り方を見直していかなければいけない。その先には動物園廃止論もあるわけです。

動物園は行き詰まり、このままではいずれ姿を消す動物園が出てくるだろうという危機感があると思います。一部の動物園関係者には共有されていても、一般社会ではほとんど意識されていません。動物園がこれまでにあったようにこれからもあるだろうと漠然と考えられています。もしも動物園がなくなっては困るのであれば、存在意義を確認し、社会で認知する必要があるでしょう。

まさに、その第一歩のシンポジウムが今行われているのだと思います。動物園もそうですし、美術館もそうですけれど、ある時期に日本社会がそれを必要として作りだし、育ててきたものだと思うのです。ですから、必要がなければなくなっただけで一向に構わないわけです。全員が要らないと思えば、むしろなくさなければなりません。誰も必要としていないものを存在させる意味はないはず。極論ですが、しかし、何らかの意義があるのだということを主張するのであれば、それを説得しなければいけない。そうした時に国立動物園という目標を立てるとすることは、望ましい動物園像をもう一回ここできちんと確認し提示する。そのことに意義があるのではないかなと考えます。

国立動物園実現のプロセスはいくつかあるだろうと思いますが、まずは望ましい動物園像を構想してみるとのことです。お手元のメモにはクエスチョンマーク付きで書きましたけれど、「国立動物学博物館」というような在り方もあるのかと思うのです。先ほどのお話にもありましたが、動物園における研究は弱くて大学に依存している。しかし飼育技術は動物園にこそ蓄積されている。だからこそ、ヤンバルクイナの保全活動の中でも動物園というのは不可欠である、動物園の協力というのは不可欠であったというお話があったわけですが、その動物の研究と展示、これを上手く合体させた施設を構想出来ないでしょうか。ここでの国立動物学博物館は国立民族学博物館になぞらえているのですが、それが国立動物園のひとつの理想像かと思います。

もう一つは、法制度からのアプローチです。動物園をコントロールしている法律の一つは博物館法です。しかし、博物館法に動物園という言葉は出てきません。動物園は法的にもとても宙ぶらりんなところに置かれています。動物園の目的や使命を示す理念を社会に向かって提示し、それを共有していこうというのであれば、動物園法が制定されるべきではないかとも思います。メモには「博物館法の限界」と書きましたけれど、博物館法はいかにも戦後の産物であって、ある面歪んでいると思うのです。たとえば国立博物館は博物館法の埒外です。博物館法はあくまでも公立と私立の博物館を対象とし、それらの水準を保ち向上させようという趣旨で作られた法律なので、教育委員会に登録するというかたちをとっているのです。教育委員会と動物園はほとんど無縁なのではないでしょうか。

さて、このように国立動物園実現へといたる道については、このあとのディスカッションで話題にするとして、重要なことは、未来を構想するためには過去を検証し、現状を分析することだろうと思います。

動物園とは地域密着型の施設だと思うのです。全国の動物園、あるいは世界の動物園を見て歩いている人は少数派だと思います。多くの人たちはまず生まれた町、あるいは生まれた地域の一番近い動物園に親か幼稚園で連れていかれるところからスタートすると思いますので、やはり、そこに住んでいる人たちがまず訪れる場所としての動物園があるのでしょう。美術館や博物館に比べて地域性が高いと言ってよいのかもしれませんが。

であるがゆえに、日本全体の動物園がなかなか見えてこないのです。日本には動物園が日動水に加盟しているものだけで86園あると申しあげましたけれど、そのすべてを見た人はたぶん日動水の人ぐらいしかいない。動物園人でも全部ってというのはどのくらいいるのかよくわかりませんが、なかなか大変なことですね。私もある時期からそれをやろうと思ったけれど、全国の鉄道にすべて乗るぐらい大変かもしれない。まだまだ三分の二くらいしか見ておりませんけれど。

全体像が見えないということは、動物園の共有している問題もなかなか見えないということだと思うのです。野生動物の収集が困難だということも、普段、足を運んでいる動物園を見ている限りではぴんと来ません。視

野を広げることによって、動物園が抱えている課題が見えてくるんだろうと思います。

動物園は従来の役割をある程度終えて、あるいは乗り越えて、新しい役割が求められている。もはやそういう段階に入っているのだろうと思います。

国立動物園あるいは国立動物学博物館の実現を訴えようとした時に、この「学」という文字、研究と言い換えてもよいと思いますけれど、これをどこまで盛り込むことが出来るかが課題になって来るでしょう。動物園という言葉をはじめ使ったのが、福沢諭吉の『西洋事情』で、これは慶応2年(1866)のことです。「動物園、植物園なるものあり、動物園には生きながら禽獣、魚衆を養えりなん」と説明しています。最初に動物園と訳されたことで、動物園から動物学が抜け落ちてしまったということはよく言われるわけですが、先ほど名前をあげた国立、大阪の国立民族学博物館、それから少し遅れて千葉県佐倉にできた国立民族博物館などが展示と研究の両方を柱にしている国立博物館のうち、「学」が入っているのが民博だけなんです。歴博あるいは歴民博というふうに略称で言いますが、設置当時の文部省は「学」を入れることにひどく抵抗したと聞いています。「学」を入れるだけでも大変なことなんです。この二つ博物館は更にいくつかの機関とともに、大学共同利用機関として人間文化機構という名の法人でくられています。

もし国立動物学博物館を目指し、かつ文部科学省を所管に選んだ時に、ここに加わるということはあるかなと、私なんかは思うんですね。そうすると人間文化機構に何で動物園なのかと文部科学省から門前払いをくらう可能性は大ですが、実は動物園は人間を考える場になりうるんだと主張したらどうでしょう。先ほどの小菅さんのお話にも出てきたとおり、動物園をどのように考えるのかということに繋がって来る問題だろうと思います、

動物園法についても少しお話してみます。博物館法では第3条で博物館の事業を定義していますが、博物館というのは実物や標本、要するに博物館資料を豊富に収集保管しおよび展示すること、これが博物館の事業だとしています。動物園が組み込まれているのは、実物を収集し保管し展示している施設であり、その実物が動物であるということだけです。もう一つ動物園にとって重要な法律が「動物の愛護及び管理に関する法律」で、つい最近、新たに改正されましたけれど、この中では動物取扱業という扱いで動物園が位置づけられているだけです。

いずれにしても、現行の日本の法律をみても、動物園をきちんと条文の中に位置付けている法律というものはないんですね。きちんと動物園を社会の中に位置付けていくためには、法制度を整備することが、具体的な機関をつくることとは別に重要なプロセスかもしれません。したがって、所管が文科省なのかあるいは環境省なのかということは非常に重要です。教育施設に重点を置くのであれば文科省であるし、野生生物の保全活動の拠点が動物園の使命だとするのであれば環境省になると思いますので、まさにどのような国立動物園が望ましいのかということに関わってくるわけです。

博物館法は、その博物館をそれぞれの教育委員会に登録するというかたちをとっています。動物園で教育委員会に登録している例はほとんどないらしいのですが、動物園の所管の実態は、だいたい公園管理の部署が所管をしている。ちなみに東京は東京都建設局公園緑地部の所管なわけです。そうすると、やはり教育からは構造的に離れている現状を認めざるをえません。

やはり検証する必要があるだろうと思ひまして、三つの問題を指摘してみます。動物園は、明治の初めに西洋の動物園をモデルに導入された啓蒙のための装置であり、教育施設であることはまず一番重要な根っこだと思うんですね。ただそれが、そのまま育ってきたかどうか問題であって、先ほど指摘したように、最初の動物園が宮内省に移されたことによって、かなり変質してしまったということがいえると思います。

それから、動物園以前から珍しい動物をみせるそういう見世物の文化があります。これも小菅さんのお話に出ましたけれど、これがもう一つ動物園が深く根ざしている問題で、なかなか簡単に否定できないと思うんですね。ですから、このこともきちんと検証したうえで動物園の在り方を考えなければいけないと思います。

三つ目は、1950年代に動物園が一気に作られたということにかかわっていますが、戦後復興が始まり、各地でこども博覧会が開かれ、それが動物園に発展したケースがいくつかあるんですね。ですから、動物園は子供向けの娯楽施設である、それゆえに遊園地を併設しているということが重要な根っこだろうと思います。

駆け足で見たいと思うのですが、まずは上野動物園の前史です。少なくとも開園の10年ぐらい前までは啓蒙装置の動物展示、啓蒙の場での動物展示を遡って考えることができます。明治5年の湯島聖堂でやった博覧会で動物が初めて展示されたといわれていますが、その前の年に非常に小規模な、これは博覧会というよりも物産会と呼んでいたのですが、これが九段で開かれました。博物館史の本では、今の靖国神社ですね、招魂社の境内だったといわれているのですが、私が調査した限りでは、千鳥ヶ淵のあたりで行われたはずで、そこはもともと幕府の薬草園があったところで、既存の建物の縁側のあたりにたくさん展示物が並べられて、それを人が外から見る、建物に入らずに外から見るというタイプの物産会でした。

ご覧いただいている写真に写っているものはほとんどが標本です。動物の剥製なんだけれど、実は軒下に生きた鳥も展示されていたようです。当時の目録を見ると生きたままの展示がおこなわれている。この写真は非常に貴重で、鳥の剥製が並んだ棚の上に、ゾウの頭骨が展示されているんですね。これは本当に面白い。ゾウの頭骨のすぐ隣には、ヒトの頭骨が三つ展示されています。人と動物の骨と一緒に並んだケースはおそらくこの時が初めてですね。江戸時代は人の骨を展示することが許されない。それゆえに、木骨といって木で精巧な人体の骨格標本を作ってきたわけで、何体かは今も残っています。ここに展示された人の頭骨は今でも東大にありまして、標本第一号とよばれています。長崎で教材として使われていたオランダ伝来の頭骨なんですね。

翌年の文部省博覧会あるいは湯島聖堂博覧会ともいわれますが、この時に北海道からヒグマが連れて来られて展示されたという記録があります。その世話役としてアイヌが一人一緒に東京にやってきました。ほかにも鶴など北海道の動物が何体か生きたまま展示されています。写真に写っているみなさんは動物園の方です。今春、湯島聖堂の動物展示が行われた同じ場所に立って記念写真を撮りました。140年を隔てる明治五年の人は動物園人とは言えないと思いますけれど、こんなふうに日本の動物園が歩んだ歴史を振り返ることはとても重要だろうと思います。

啓蒙の場として象徴的な写真をお見せします。内国勸業博覧会は万国博覧会に対して国内向けに開かれた博覧会で、明治10年に第1回目の博覧会が上野公園で開かれました。これは明治14年の第2回の会場風景ですが、この博覧会の美術館として建てられた建物が翌年から博物館に使われていくわけで、上野動物園ができる前の年ですね。博物館の背後が動物館でした。第一動物館という看板が出ていますが、ずらっと飼育舎が建てられて、牛が引き出されているのがわかります。馬もいるようです。はっきり分かりませんが、いずれにしても家畜の

展示ですね。勸業博覧会ですから、産業を興していくという意味でも、家畜の実物を見せて、日本の社会でどのように育成するかを考えさせる非常に重要な使命を持った動物館と言っていると思います。

これがなぜ象徴的かというと、すぐ先に徳川家の霊廟があるんですね。これが、上野公園になる前はここが寛永寺で、将軍家の菩提寺として墓所が設けられていました。江戸時代には聖域であった場所のすぐ目の前に家畜が飼われたこととなります。これは明治の博覧会、あるいは文明開化を象徴するような光景で、そこに動物の展示というものがどう始まったのかがよく教えてくれます。そういえば、上野動物園の中にも藤堂家の墓所が取り残されています。

つぎは見世物の話です。見世物のことはいろいろと研究されているので簡単に済ませたいと思いますけれど、これは1821年ですから、上野動物園ができる60年前でしょうか。長崎にやってきた一番(つがい)のラクダの姿を描いたものです。10年近く日本国内を興行して回りました。江戸両国で興行された時に出回った引き札によれば、「ラクダのいばりを製して、起死救命の靈薬とすることは蘭学家の知るところなり。庄にこの図を貼りおきて常に見るときははしかを軽くして悪魔を去るの妙あり。また靈獣、雷獣ラクダを恐るること甚だしく、ラクダの居る所へは雷落つることなし。ゆえにオランダ人はラクダの図を持って雷除けの守りとす」ということが記されています。ラクダのおしっこが薬になる。それから、その絵を貼っているだけで「はしか」にかからない。あるいはこれを見れば雷が落ちない、雷除けになるということが語られている。それから、この時は雄雌一番のラクダで、これを見るだけで夫婦和合、仲良く暮らせるということもご利益としてしきりに訴えられたものなんですね。今の動物園で、ラクダの解説にそんなことは書いていないですよ。その動物の語りが今日までどのように変わってきたのかということも検証してみる必要があるだろうと思います。

明治の後半になると、上野動物園でもラクダが飼われるようになりますが、このラクダが、実は日清戦争の戦利品、戦利動物だったのです。先ほどもふれたとおり、日清戦争のあとで宮内省が命じて動物園を東京美術学校側に拡張します。矢印を付けたところにはっきりと「戦利品」と記されていますね。戦利品、ようするに戦場から勝利の証として連れてこられた動物たちの展示のスペースでした。先ほどの江戸時代の動物の見世物の語りが今から見れば荒唐無稽に見えるかもしれないけれど、この時のラクダの説明であっても、今とはまったく違うわけですね。このラクダは、旅順で手に落ちたラクダで、おそらく敵が大砲を引くのに使っていたらう。皇太子殿下より当園へ下賜されたものであるという由緒が強く語られているわけです。ですから、動物園でラクダ、まあ、これラクダに限らないんだけど、動物がどのように語られているのか、今の語りがベストなのか、これからも変わる可能性があるのかということなども、過去を知ることによっていろいろ教えられるのではないかと思います。

ちなみに、最近、東京の動物園にラクダが居ないということに気がつきました。横浜にもほとんど居ないんですね。横浜はこの野毛山動物園の「ツガル」が居るぐらいで、知らず知らずのうちに動物園の中の動物はどんどん変わっているんだなって、改めて教えられました。これはツガルの「ご挨拶」、動物がいかに語られていく時に主語が誰かということがやっぱり問題になると思います。「私はツガルです」と言っているから、主語は私、私というラクダですよ。こういう語りは非常に少なくなっている、動物に一人称で語らせることはほとんどの動物園でやらなくなっていると思います。それは簡単に擬人化に繋がってしまうので避けているわけです。

2005年に、千葉のレッサーパンダをめぐる見世物論争が起きました。しかし、ご覧いただいている新聞記事は2006年の新聞記事なんですね。相変わらず、レッサーパンダが立ち上ったということが新聞記事になってい

ます。千葉に行くと、このパンダのご覧のようなモニュメントが立っております。まあ、見世物の問題は入り込むといろいろと奥が深い、というよりも私自身、最初書いた本が『美術という見世物』（講談社学術文庫）でしたので、動物園は見世物だ、いや動物園は見世物であってはいけない、という二元論には慎重に対応したいと思います。見世物には見世物の論理というのがあるんだということをよく知った上で、否定するならそれから否定すべきだと思っています。この問題にはここでは深入りしません。

珍獣の見世物に絡んで、動物芸の問題も動物園を考える上で避けて通れません。二頭のチンパンジーどちらも服を着ていて、よく見ると襟に「大阪市立」と書いてあります。これは大阪の天王寺動物園の中にあるセメント像です。戦前のことですが、リタとロイドと名付けられた二頭のチンパンジーはたいへんな人気者で、たくさんの人を集めました。これをまねて、ほかの動物園でも動物に芸をさせることになりました。チンパンジーに服を着せ、自転車に乗らせるとか、タバコを吸わせたりすることを普通にやってきたわけですよ。ゾウだって、ラッパを吹いたりタイコを叩いたりさせられました。

先ほどの動物愛護法、最初は愛護ではなく保護と言っていましたが、それが法制化された時に、動物に芸をさせることは虐待だから止めようということになりました。とても根深い問題ですね。今も刊行されている『どうぶつと動物園』（東京都動物園協会）という雑誌の表紙をご覧ください。1963年の時点では、この写真を表紙することはまったく問題なかったことに驚かされます。チンパンジーに晴れ着を着せてウサギ年の新年を祝っています。動物園はこの世界から足を洗ったということになってはいるのですが、しかし、動物を展示する時に気をつけないと、先ほどの一人称の語りもそうですが、すぐに擬人化が入り込んでしまうというふうに思います。過度の擬人化は動物を見る目を曇らせます。

戦後からの復興ということでは「インディア」が象徴的な存在ですね。子どものための動物園であることが強く打ち出され、それを今なお日本の動物園が引きずっていることは否めないだろうと思いますね。私は浜松の生まれです。まさにこの光景が私にとっての動物園の原風景です。ゾウが太鼓を叩いていて、手前にラッパやベルが置いてある。ゾウに芸をさせることが当たり前だった時代です。

なぜいくつもの動物園はお城の中にあるんだろうと気になり出し、その問題を少し追いかけてまいりました。写真に写っている浜松城も1958年に作られたものです。お城も動物園もともに戦後復興の中で作りだされてきたと断言していいのかなと思います。そんなふうに見ていくと、やはり1950年代に地方自治体が競って動物園を作ったのは、やはり子どものためということですね。

小田原も全く同じです。1950年に小田原城の中でこども博覧会を開き、ゾウを呼んできて、「梅子」と名付け、ちなみに浜松は「浜子」です。小田原は梅が名産なので「梅子」と名付けました。3年前に「梅子」が死んだあとは、小田原城から次々と動物が姿を消して、これは去年撮った写真なので現状はよく分かりませんが、写真では最後に残ったケージが一つ見えるだけです。手前のベンチが置いてあるところにも、かつては動物を展示したケージが並んでいたのですが、動物園が姿を消して、代わりに小田原城では城門がつつぎと復元されています。史跡整備という名の下にですね。少なくともここでは、戦後生まれの典型的な動物園が終焉を迎えているということが言えるだろうと思います。市立動物園が多いということはそれなりの必然性があるって生まれてきたわけで、それぞれの歴史を歩んできたと思うのですが、今はその役割を終えようとしているのでしょうか。動物園があったという歴史すら消されてしまうのではないかという気がします。しかし、すでにいろいろと話が出たように、一方では動物園が新たな使命、新たな役割を担い始めていることは否定できないだろうと思いま

す。

私が好きな光景をお目にかけましょう。とても動物園とは思えないですね。小屋があって、フェンスの向こうにはカモシカが見えます。フェンスのこちら側も動物園です。これは里山をテーマにし、人と動物の関係を積極的に考える富山市ファミリーパークで撮影をしたものです。

動物園の新しい使命の中で、野生生物保全を掲げようとしても、地方自治体の運営ゆえに限界を抱えていることはこれまでも指摘がありました。課題はグローバルなのに、地方自治体による行政サービスはあくまでもその行政区域内に限られるというジレンマを抱えています。一つの新しい在り方なのかなと思ひまして、ツシマヤマネコの飼育下繁殖事業を環境省が行い、対馬の保護センターを含めると六つの動物園が関わっていることを紹介します。動物園のひとつの未来像を示しているのかなと思います。動物園がそれぞれの地域に密着しているだけでは、もはや収まらない時代なのだろうと思うのです。

先ほども話題に出ました緊急避難の場所としての動物園もあります。横浜市立野毛山動物園でしばらく前に撮った写真ですが、何の人だかりだろうと思って寄って行ったら、飼育員がタヌキの病気の説明をしていました。横に「疥癬」と書いたプレートを持った人がいます。熱心な雰囲気には驚きました。動物園は事故などに遭った野生動物を一時的に保護する場所でもあるのですね。

それから、家畜や家禽類、あるいは日本産動物や在来種を視野に入れた動物園も増えています。富山市ファミリーパークでは日本のニワトリの全種類を集めて展示することを実践してきました。そしてそのニワトリをどのように食べてきたのかということまで展示しているんですね。鳥料理の説明パネルもあります。さらに一枚のパネルには、ニワトリは「文化遺産」であるという説明もありました。動物園は自然だけを相手にする場所ではないというのですね。むしろ人と動物の関係を考える場所になりつつあります。

この写真はちょっと奇妙なのですが、犬の展示です。長野県の小諸市立動物園です。お城の中の動物園に関心があるので、どうしてもそういう所に足を運んでしまう。小諸も小諸城の中になんとか奇跡のように残っている動物園です。残っているといったら失礼ですけど、なんと大正時代にできた動物園なんですね。これまでに何度か足を運んでいるのですが、ある時びっくりしたのは、何も無いところに立派なケージができて、その中に犬が飼われていたからです。ケージの中には犬小屋までありました。犬小屋だけで十分じゃないかって思いましたが、これは長野県の在来犬、川上犬の展示でした。

動物園の理念が求められています。私に関わっている文化資源学会で、ちょうど昨年9月に富山市ファミリーパークをお訪ねしました。山本茂行園長にお話をうかがったとき、園長が最初に示してくれたスライドには、「森・人・命・地域を元気に」という言葉が記されていました。それがこの動物園の目指す道なのだということでした。写真は木に登る子どもたちの姿で、動物が写っていません。でも、これは人間という動物の子どもたちの姿にほかなりません。動物園の在り方問いかけてきます。

次の写真はその時の話し合いの光景なのですが、このような部屋がある動物園は案外と少ないのではないかなと思うんですね。よく学生を連れて動物園を訪れ、動物園について話し合いたいと思ってもなかなかそのスペースがありません。上野動物園でさえないので。動物園について語る場所が動物園の中に用意されていない。考えること、語ること、そして、何よりも語り合う場が作られていかなければならないと思います。

最後に引いたお二人の言葉は「戦う動物園」から採りました。はじめが岩野さんの発言で、「動物園はこれから100年、200年と続かなくちゃいけない」。凄いですよね、動物園はようやく140年の歴史を重ねたところなのに、「まだ100年、200年続くぞ」という強い想いが感じられます。今ぐらいの行き詰まりなら、乗り越えればよいのだという気持ちが表れている。つぎは小菅さんの発言で「人間が動物であるかぎり動物園が必要だ」というものです。動物園は私たち人間が何者であるかと考える場所でもあるのですね。

長々とお話しをしてしまいましたけれど、これからも動物園について考えましょうということをおのメッセージにして、これで終わりたいと思います。

ありがとうございました。